

房総半島巡検

松本 清

今回のこの巡検は、「南房総（外房）の地形、集落及び産業」というテーマで、9月10日午前10時10分、千葉県立中央博物館玄関前集合で始まった。

10日は、博物館、茂原市にある関東天然瓦斯開発株式会社（天然ガス利用工場）を見学した後、夷隅郡の御宿町へ。この町は人口が約八千人ほどの町で、海女・海上による潜水漁で知られている。御宿駅に降り立った時は、どことなく寂れたような印象を受けた（空が曇っていたせいかもしれない）が、この町でもリゾート開発が進められているという。メキシコのアカプルコと姉妹都市ということに因んだサボテンシンボルタワーやメキシコ記念公園、月の砂漠記念館・記念像などがあり、海水浴場にはサーフィンを楽しむ人々の姿も見受けられたので、7、8月の海水浴シーズンにはもっとにぎやかだったことだろう（と思う）。

11日は、午前はまず官軍塚、千葉県栽培漁業センター、そして勝浦市役所へ。勝浦市は、千葉県のリゾート開発の先駆とされている。実際に、海中公園、行川アイランドなどの行楽・観光施設やリゾートタウンなどが見られる。しかし、過疎化が進行しつつある外房地域としては、リゾートマンションよりも定住型のマンションの建築を望んでいるという。また昭和59年には、学生が下宿することを見込んで、国際武道大学が建てられた。このように勝浦市では、昭和30年代の観光ブーム、40年代の民宿ブームを経て、現在、文化都市（学園都市）のまちづくりを目指しているのである。

午後は、海中公園、荒川の川廻し、誕生寺を見学し、日も暮れかけた頃に鴨川市役所に到着した。ここでもリゾート開発についての話を伺うことに

なるが、勝浦とは一味違う開発が考案されている。鴨川市では、減少傾向にある人口のうち19%が高齢者であるということ、世間では労働時間が短縮し余暇時間が増えつつあるということなどの現実を踏まえて、お年寄りにやさしいリゾート、あるいは、単なる観光から滞在型のリゾートへの移行が促進されているのである。市民の文化、経済、福祉の向上を——という理念に基づいて、現在では太海地区の「アナトリア鴨川リゾート計画」、前原海岸（鴨川河口左岸）の「鴨川マリーナ計画」のふたつの構想を打ち出している。それから、プロ野球球団の日本ハムのキャンプ場を始めとするスポーツ・レクリエーション施設の誘致・増設も計画されている。

12日は、鏡忍寺、嶺岡山の地すべり、太海フラワーセンター、仁我浦（捕鯨業）、石堂寺、千葉県水産試験場を廻り、野島崎（千倉—白浜間、元録地震・関東地震による地盤隆起、波食台）を最後に、長かった巡検も無事終了となる。

この巡検報告では、すべては書ききれないので、とりあえずタイムリーな話題として、リゾート開発を中心に書いてみた。御宿町、勝浦市、鴨川市、と同じ外房地域にあり、同じような問題（過疎化や高齢化など）を抱えているわけで、リゾート開発構想も似ていると言えれば似ている。しかしまた、小さい所でそれぞれに独自性が見られたりして、少しずつ違っているところが大変興味深かった。

今回の巡検は、まったくそのテーマの通り、外房地域の地形、集落及び産業を存分に見学することができたように思う。

（9月10～12日 式教官指導）